

冲

9
2023

（本期封面）



止 め 名

能村 研三

宗左近と登四郎

二〇一六年に詩人の宗左近の没後十年を記念して市川市国府台の里見公園に詩碑が建立された。

碑面には市川讀歌の詩の一節

曙いま世界が垂直

市川 芯の芯の透明

はばたく虹の風たち

が刻まれている。

詩碑の建立をきっかけに改めて宗左近を顕彰しようと市川で宗左近と親しかった人たちと一緒に「宗左近・芯の会」という文化団体を立ち上げた。この会は現在市川市芸術文化団体協議会にも加盟しており、九月十二日から十七日まで市川の全日警ホールで開催される芸文協主催の「文化集会」では、「芯の会」で宗左近と能村登四郎の交友関係をテーマに展示を行う予定である。

宗左近は同じ市川に住んでいたこともあって、「沖」の周年記念号には玉稿を頂戴し、二十五周年の記念大会では講演もしていただいている。

そして何より深く印象に残っているのが、平成十三年先師登四郎が亡くなった時に葬儀で弔辞を賜ったことである。弔辞と言ってもそれは宗左近の

白日傘強く開けり佳人にて
梨園には止め名のけぢめ白四龍
大南風その気になれば出来ること
受けて立つ構へに立ちて大西日
革靴を素足履きして街に出る
梅雨明けの山河の澄みに心置く
漆喰の顰波均し梅雨明くる
昼寝より覚め許す気になりにけり
ごきぶりを三角点に追ひつめし
瑞兆の空に喜鵲の鳴き渡る

詩で綴られたものであったことに胸を打たれた。文化集会では宗左近がそれを便箋にペン書きで書いたものの展示も予定している。

平成九年、宗左近の提唱により民間団体が設けた「市川市民文化賞」の第一回目の受賞者に登四郎を選んで下さった。今から思うと宗左近の考えの中には最初から登四郎ありきでこの賞が制定されたように思えてならない。登四郎も数多くの賞を受賞しているが、地元市川で市民からの推薦で受賞したことを大変喜んだ。

その翌年、この賞の記念として国府台スポーツセンターの陸上競技場の一角に

春ひとり槍投げて槍に歩み寄る

の句碑が建立された。

宗左近が登四郎の著書『人間頌歌』に寄せた一文で次のように書いている。

この槍は、獲物を狙ったのではない。対象など、ありえない。ただ、投げないわけにいかない。そして突き刺さったとき、傷むのは大地でなくて、槍である。だからこそ、震えている槍に歩み寄る……

独り身の

鮎釣らる山河の彩をしたたらせ
夏山の宿天上に星敷けり
濁世に打ち上げられて昼寝覚む
ガリバーのやうな男が目高飼ふ
何よりも伯母の扇子の動きやう
夏痩せて変人の域近うせり
機関車にも余生ありけり青しぐれ

今年の西瓜は失敗であった。いつもは良かったのかと聞かれても、そうとは言い切れないのであるが、ともかく満足のいく西瓜は一個も収穫出来ずに終了した。小学生の頃、友達に西瓜を上げるよと言われて、大きな西瓜を載せた自転車を押して喜んで帰って来たのであるが、後日他人の畑を荒らしたと担任の斉藤ミツ先生に怒られたのであった。その時の大きな西瓜が忘れられず、西瓜は大玉と決めていつも作るのである。今年は油断して、瓜類の葉っぱを好む蠅のような虫にやられたのはじめ、中玉ぐらいに大きくなつては割れてしまった。猛暑のせいかもしれないが何とも言えない。
登四郎先生の全句集の中から西瓜の句を一句見つけた。〈独り身の西瓜いつまでも冷し置く〉という御句である。大きな西瓜に違いないが、確かに一人だと手が出ない。今は切り分けられた西瓜が人気である。冷蔵庫に入らないと言う。昨年、孫に食べさせようと車で帰る息子夫婦に一番大きな西瓜を用意したが、「要らない」と言われてしまった。
誰が何と言おうと、来年もまた大玉西瓜に挑戦するつもりである。

濤声集

鏡の奥へ

千田百里

六月やフォーマル服の売場寂び
バーゲンセール森をさ迷ふ薄暑かな
口紅の見本林立パリ―祭
寄せ書の縦・横・斜め青あらし
昏きより現れて暗きへ鶴飼舟
*大暑かな鏡の奥へ人の去り

青ざめつつ

辻美奈子

*あかときや蟬は青ざめつつ生まれ
砂に寝て我が身根の生ふ夏怒濤
青嵐少年の語尾奪ひけり
緋目高の腹のなにやら透き通る
浮人形掴む赤子の知恵はじめ
中陰をとほく離れし天の川

蒼茫集

足音

甲州千草

朝曇黙々と噴く炊飯器
* 足音で解る人あり蟻地獄
蛇過ぎし一面しばし無音なり
炎帝へ白撥ね返す河原石
母いつも風恐れぬし盆の入
採血を補ふための生ビール

汗は入らせ

林昭太郎

打ち明けてよりの沈黙ほたるの夜
長考に入りし対局夜の蟬
作り滝ここぞと思ふところに岩
青梅に産毛をさなに指力
蛇泳ぐ水脅かし脅かし
* 眼に入る汗は入らせ陶土練る

臆病

町山公孝

* 夕焼を追ひかけてゆく中央線
空蟬のまなこに残す矜持かな
雨蛙口先だけで臆病で
予報士の試験は免除雨蛙
居酒屋の予約満席大花火
息深く吸うてみるなり夕立晴

盆唄

小山田子鬼

盆唄のまづ魂を呼ぶ声か
死の順の先を越されし遠花火
* 生かさされて万の芒の中を行く
爪立ちて届かぬ恋とさくらんぼ
夜蛙の声のさざ波網戸押す
行末はもう見え通し氷菓食ふ

飛鷹選評



能村 研三

鏡中に我が来し方や更衣

川和 宏平

毎年季節の移り変りに合わせて行う更衣。街を歩く姿を気分一新させてくれる。出かける前には、身だしなみを整えるため向き合う鏡であるが、この鏡こそ長年自らの来し方をつぶさに見守ってきたのである。ある時は楽しく嬉しい顔の時もあっただろうし、ある時は悲しみに打ちひしがれた時の顔を映してくれていた。そんな自分の歴史を知り得ている鏡の存在が愛おしく感じた。

身じろがぬ蟾には蟾の時間軸

吉村さよ子

蟾は容貌怪異にして動作の鈍重なことから、芝居などでは妖怪のように扱われたりもする。実際、暮れ方の庭の真ん中あたりに鎮座していると、ぎょっとさせられる。追つてもなかなか逃げないので、ますます不気味である。しかし、その容貌とは裏腹に温厚にして争いを好まない動物で、蟾には人間社会には判らない蟾の時間軸があるのだろう。

白壁に描く青鳶の草書体

池田 文枝

洋館造りの白壁に今年も青鳶が覆った。春に萌え出た鳶の芽が育ち青鳶が覆い始める。鳶の青さに、一際白壁が

輝き草書体のように這う鳶の枝が心地よく涼しさが感じられた。草書体という比喻が面白い。

白南風や鷗の憩ふ護衛艦

坂井 博

船を運行する人にとつて風の動きは肝心なことで、黒南風と白南風の区別もはっきり理解している。梅雨の陰鬱な暗い雲から放たれる南風を黒南風、梅雨が明けて青い空に白い雲が浮かぶような頃になると白南風。白南風が空に流れて夏の訪れを告げる頃、護衛艦の周りで憩う鷗の動きが眩しかった。

ちちろ虫森おぎろなる闇の果て

小藤真由美

ちちろ虫は主に草地や暗い家の片隅など身近なところで鳴いている。広大な森をとことりせましと鳴いているちちろ虫を詠んだ句。「おぎろなる」とは広大という意味だが、果てしない闇の彼方から聞こえてくるちちろ虫の音は寂しく秋の風情が感じられる。

大賀蓮種子大いなる千年紀

頓所 敏雄

大賀蓮の種は、千葉県の縄文時代の遺跡から植物学者の大賀博士によつて発見されたもので、その種から蓮が開花するとは誰も思わなかったことだろう。長い歳月を越えた古代蓮のロマンと神秘性に思いを馳せた句である。

釣られたる時飛魚一の翅光る

工藤 邦子

飛魚は初夏北上して産卵し、夏告魚と呼ばれる。水面から飛び出した瞬間白い腹が、光った空に透けるように見える。夏の太陽が輝くなか真っ青な海の中を群れをなして滑空する姿は壮観で、釣られる瞬間も飛魚の翅を光らせていた。

緑の夜

栗坪和子

*東京は坂多き町緑の夜
朝涼や玄治店とはこの辺り
白南風のいづこへ抜けし隅田川
朝顔にからりと格子小網町
草矢打つ汐の匂の鯨塚

美しき形

本池美佐子

石塔の崩れしままや夏の草
泡盛や古老の深き笑ひ皺
噛み合はぬ話さておき冷素麵
蓮の香や雨の匂ひを孕ませて
総立ちとふ美しき形や蓮揺るる

群れぬ蟻

村上葉子

渾身の独白ありぬ夏鶯
紫陽花は鬱を隠して毬となる
ひそやかに蘇生を待ちし大賀蓮
群れぬ蟻群れぬ蟻を追ひ越せり
気がつけば武器我の手に蠅叩き

反転

七田文子

青葉潮うねりて命運び来る
金魚半転またも眠りの遠ざかる
日の斑散る風の抜け道野萱草
地下鉄を出るや祭の渦の中
夏帽子ときどき急に飛びたがる

五体の透明に

須賀ゆかり

*滝しづきやがて五体の透明に
涼しさの間口一間旅を売る
川幅とふ迫り来るもの梅雨に入る
目高飼ひ少年の日を取り戻す
日輪の翳る化野姫女苑

木の家に住み

鈴木基之

*日本の木の家に住み水を打つ
補聴器を外して杜の蟬しぐれ
土間涼し外に音するポンプ井戸
炎天に影歩きをり草田男忌
写楽絵の骨の出てゐる渋団扇

羽抜鶏

宮岡弘

*若冲を凍り付かせし羽抜鶏
怒らすもすぼめるも肩甚平着て
骨片の真砂となる日仏桑花
土瓶割急がば曲がれを家訓とす
正論を凌ぐ屍理屈冷奴

無一物

菅原健一

とまりゐるまだひらがなのいとんぼ
ででむしや弁慶像も見得に倦み
夕立あと空つかの間の無一物
友逝きてはや夏帽を仕舞ひけり
かたつむり恋の途中の小ぬか雨

涼し

中村重幸

一棹に涼しき舟となりにけり
青竹の切り口涼し竹人形
郭公の声一村を余しをり
*青芦や杭一本の舟溜
千段を登る郵便雲の峰

打水

小坂尚子

蓮の葉の雫ひとつになりにけり
つなぐ手のするりとはなれ螢狩
身ほとりに渚のなくてソーダ水
*打水にあかり重なる夕べかな
切り岸をそびらに母子昆布干す

沖作品



能村研三選

* 鏡中に我が来し方や更衣

東京

川和 宏平

間引かれし病棟の灯や梅雨寒し
ガス灯にトリコロールやパリゝ祭
水打つて父待つ路地の夕べかな
夏休み藁の匂ひの祖母の家

* 身じろがぬ蟾には蟾の時間軸

千葉

吉村さよ子

六月や引き戸のおもき餅菓子屋
太宰忌の夾竹桃の紅きこと
顔触れに息子加はる溝浚へ
大草鞋梅雨の重みを加へをり
* 白壁に描く青蔦の草書体
開いてはならぬものあり落し文
遠山の雲居に架かる梅雨夕焼
次々に雲を吐き出す青嶺かな
雲の峰仁王履くてふ大草鞋

池田 文枝

* 白南風や鷗の憩ふ護衛艦

坂井 博

何処へと蟻の葬列揚羽曳き
黒南風や切られの与三の七五調
風暑しシルバー割のロック座に
夜の匂ひ残す屋台の朝ビール
眈に母の面影 鳳仙花
古を淡く縁取る紅芙蓉
曼珠沙華雫に燃ゆる紅深し
名水のまろみ汲み上ぐ萩の宮
* ちちろ虫森おぎろなる闇の果て
十葉の花叢はさも白上り
桑の実や脇役一途おはぐるめ
玉敷の朝ありけり蓮の花
* 大賀蓮種子大いなる千年紀
吾が転ぶ仏の掌とは蓮青葉

東京

頓所 敏雄

小藤真由美